

3-1 第1分科会「秋田の地図をつくる」まとめ

担当 石井宏一

分科会テーマ	秋田の地図をつくる（街の中に潜在している「情報」を通じて、秋田はどのような都市なのかを考えてみよう）
担当者・メンバー	担当者 石井宏一 メンバー（6名） 近藤芽未 中村ふみ 鎌田佳佑 鈴木湧平 小松佳世 三上翼
活動の内容	秋田の街のなかに存在する情報をもとに「地図をつくる」ことを通じて、「秋田の都市としての特徴」を歴史的背景な背景などから明らかにし、考察していく。
活動のプロセス	<p>「地図」をつくり、「秋田の都市としての特徴」を考察するために、実際に秋田の街を散策した。そして、今回は2つのグループに分かれて活動を行った。</p> <p>一つ目のグループは、秋田駅西口から南大通、広小路を散策し、その時に仲小路には小規模の面白い店が多く、歩いていて楽しいと思い、仲小路について調査を始めた。実際に仲小路の商店街の人に聞き込みをすると、ここ5年の間に店が入れ替わっていて、活気付いていることが分かった。そこで、最近仲小路に何があったか疑問に思い、仲小路の歴史に詳しいという食器の「さかいだ」の社長にインタビューをした。昔、仲小路の周辺は闇市になっていたが、西武などの大きい店舗ができたことで街が整理されていき、さらに、日赤病院ができたことで、商店街に活気が出てきたようだ。しかし、13年前に日赤病院が移転したことで、仲小路の人通りが少なくなり、店も減ってしまったのである。そこで、商店街の人たちは「女性の会」を立ち上げ、商店街内にある明德館高校と連携したイベントを主催し、活気を取り戻そうとしている。また、13年前に街を賑わせた日赤病院跡地には、現在、県立美術館や秋田にぎわい交流館が建築中であり、これらの施設ができることによって、日赤病院があった当時の時のように、商店街を訪れる人の量もまた変化していくと考えた。このように、仲小路は一度、衰退したけれど、街の人の努力によって再び活気を取り戻そうとしているため、面白い街だということが分かった。</p> <p>二つ目のグループは、秋田駅東口から東通付近を散策した。散策をしてみると、古い建物が少なく、比較的新しい建物が多いこと、学校園が密集していることに気が付いた。そこで、なぜ、学校園が密集しているのか、秋田駅西口側・秋大付近に比べて新しい建物が多</p>

	<p>いのかについて、文献を参考にしながら深く掘り下げてみた。東通付近は、昭和 39 年、一面田んぼであった。昭和 52 年に商店が増え、住宅街となり、それに伴い人口が激増した。その後、次々と学校が開校し、また秋田駅東口前広場が完成したり、秋田中央道路が供用開始したりと街が整備されていった。また、街と学校の関係であるが、学校園は周辺の人口が増加し、住宅街となってからできてくるものである。西口側と東口側の学校の開校年を比較してみても、西口側の学校が明治頃であるのに対して、東口側は昭和の後半頃に開校したものが多かった。このことから、東口側は比較的新しい街であることが分かった。</p>
<p>まとめ</p>	<p>「地図をつくる」ことを通して、まず仲小路は 13 年前の日赤病院の移転によって、一度衰退したけれど、街の人たちの努力により再び活気を取り戻そうとしているため、面白い街だということが分かった。一方、東口側は、最近になり秋田中央道路ができたり、多くの学校園ができたりと比較的新しい街だということが分かった。このようなことから、秋田という都市は、様々なところにそれぞれの魅力があると考察した。</p>